



「教える」よりも「聴く」

〈富山県〉中村 凡子 44歳
なかもむら なみこ

ところが後日、私の顔を見て駆け寄ってきてくれた彼女は言った。

「あの日、話を聴いてもらって、気持ちがあっさり軽くなって、おっぱいの痛みが楽になったんです。やめる理由がなくなりました。本当にありがとうございます」

教えることより「聴くこと」の力を実感した瞬間だった。その後約1年半、母乳を続けたと後に聞いた。

「母は強し」とよく言うけれど、ちょっとした支えがあれば、もっと強く、優しくなるのだ。そんな手助けができるこの仕事、当分辞められそうもない。

せきを切ったように彼女は話した。母乳の良さがよく分かっているからこそ、ずっと悩んでいたこと。でも、痛みが強くて、体中がつかうて、今は授乳に恐怖を感じることに。

母乳育児支援を行う専門職として、言いたいことはたくさんあった。でも「育児を楽しみたいと思えなくて」というMさんの言葉に、私はそれを全部飲み込んだ。

「今まで精一杯がんばりましたね」聴き終えた私がそう言うと、Mさんの目から涙があふれた。

それから、母乳を中断するためにはドバイスをして、Mさんを見送った後、無力感に包まれた。Mさんの思いをかなえるために、もっと何かできたのではないか。取り返しをつかないことをしたのではないか……。

「もう、おっぱいをやめたいんです」Mさんは、思い詰めた表情で私に訴えた。「母乳で育てたい」と、出産直後から人一倍努力してきたお母さんである。母乳の量は少しずつ増え、赤ちゃんも順調に育っていたが、おっぱいの痛みが良くならないのが悩みで、母乳外来に通っており、この日は私が担当であった。

自分の母乳で赤ちゃんを育てる。ごく自然で、そして掛け替えのない体験だ。しかし、知識や支援を得る機会がないために、途中で諦めてしまうお母さんがたくさんいる。かつての私もその一人だった。だから、助産師になってからは、一人でもそんな人が少なくなるようにという思いでやってきた。けれど「今はとにかくMさんの気持ちを聴かなければならない」と思った。